

# 希望

チューリツヒ日本人学校便り

平成 27 年 5 月 11 行

第 7 号

発行人 校長 鈴木史良

## あいさつ へんじ + α

—— 教育者、森 信三の教えや生き方から学べること ——

5月の全校集会で、校長から「あいさつ へんじ+α」という話をしました。授業中は先生の話に集中し、自らすすんで考え、発表し合って互いに高め合う姿勢が大切なことは言うまでもありません。だから、授業さえ頑張っていれば成績が伸びると考えている児童生徒がいるかもしれませんが、実はそうではないのです。一見、学習に関係のないことのように思われるかもしれませんが、気持ちのよい「あいさつ」と元気のよい「へんじ」、それにあと一つのことを徹底してできるようになると、学習に臨む姿勢がしっかりと学習効果が上がるという教育実践があり、日本でも多くの学校で取り組まれています。

それを考え、実践したのは、森信三（もり しんぞう）という教育者でした。森信三は明治29年に愛知県に生まれました。父は国会議員で裕福な家庭のお坊ちゃんでしたが、その後父がすべての財産を失い、絶望した母は子どもを残して実家へ帰ってしまいました。信三は3歳で貧しい小作農へ養子に出されたのです。

尋常小学校を卒業し、トップの成績で高等小学校に入学した信三ですが、家計が苦しくて中学校への進学をあきらめ、11歳で母校の小学校で鈴を鳴らし、掃除をする用務員として働き始めました。

信三が13歳の時でした。祖父が「これが読めるか。」と一編の漢詩を渡しました。それは江戸時代の儒学者、頼山陽が13歳の時につくった漢詩でした。それを見て、同じ13歳でこれほどの詩作ができるのかと驚くと同時に、その詩を読むことさえできない自分がみじめになりました。恥ずかしさと悔しさでいっぱいになった信三は、このことをきっかけに本気で学問に立ち向かおうと決心しました。それから人が変わったように勉強し始め、周囲の推薦を受けて上級学校に進学し、小学校教師になり、やがては大学教授となって、哲学、教育の面で活躍しました。その信三の教えが、全校朝会で紹介した次の言葉です。

列 千 載 青 史	安 古 人 類 得	人 生 有 生 死	無 天 地 始 終	逝 者 而 如 水	十 有 三 春 秋
-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

頼山陽が13歳の時につくった漢詩

朝のあいさつ  
ハイというへんじ  
はきものをそろえ、イスを入れる

この3つの教えを  
遅くとも小学校低学年までにやれば  
他のしつけはできるようになる

全校朝会では、他校の取り組み例（あいさつ へんじ くつならべ等）を紹介して終わりにしましたが、森信三の教えは児童生徒たちのためのものだけではなく、教師にも

あります。私が心に留めている教えを紹介します。

**眼は広く世界の流れを捉えながら  
しかも足元の紙くずを拾う**

**教育とは民族の文化と魂を受け  
継ぎ、伝えていく大事業**

教師を志す者が、自分の人生観、世界観をもたなくてどうするのですか。眼は広く世界の流れを捉えながら、しかも足元の紙くずを拾うという実践をおろそかにしてはなりませんぞ。

教育とは、流れる水に文字を書くようなはかない仕事。しかし、それをあたかも岸壁にノミで刻みつけるほどの真剣さで取り組まなければならない。教師自身があかあかと火を燃やさずについて、どうして生徒の心に点火できますか。

## 第45回 世界児童画展で本校児童生徒が入賞！

1970年に大阪で開催された万国博覧会を機にスタートした世界児童画展は、子ども達の感性と理性の調和のとれた成長を願い、子どもが自ら創り出す造形文化の推進支援と、国を超えて世界の人々をつなぐ国際相互理解を目的として開催してきました。(主催：美育文化協会、後援：外務省・文科省・都道府県教委他)

本校からもこの児童画展に応募し、すばらしい成果を収めることができました。入賞した児童生徒のうち、3名は既に本校を去りましたが、本校に在籍しているAさん、Bさんを全校朝会で表彰いたしました。今月行われる写生会(5/22)への期待も膨らみます。

文部科学大臣奨励賞 Cさん「アレッチと兄弟」

特選 Aさん「皇太子殿下ご訪問」

入選 Dさん「大きいぞ、ウスター城」

入選 Bさん「私と山と城と」

入選 Eさん「思い出」



入賞、おめでとう！

## 第1回校内避難訓練(地震・火災)を実施

5月8日(金)、2校時目の開始直後に突然、校内緊急放送が入りました。

「地震が発生しました！」抜き打ちに実施された避難訓練の始まりです。

揺れが収まった後、音楽・家庭科室から出火したのでグラウンドに避難との放送が流れ、職員室前廊下が通行できないことを察知した子どもたちは、教師の指示に従って非常口から階段を下りてグラウンドに向かいました。この段階でのルールは「お・か・し・も」、つまり「押さない」「駆けない」「しゃべらない」「もどらない」の大原則です。グラウンドに全員集合し、点呼が終わるまで要した時間は1分54秒。たいへんスムーズに避難できたと思います。校長講評の中で、「自分のいのちは自分で守る」ことの大切さを再認識した子どもたちは、他の避難場所「かわうそ池」、校舎内の非常ベルや消火器の位置確認も真剣な表情で取り組んでいました。

